

筑波大学附属駒場中・高等学校

第43回教育研究会のご案内

「主体的な学び～SSHの成果と展望～」

学習指導要領の改定に関連して、アクティブ・ラーニングの視点に立った深い学び、対話的な学びがこれからの教育の柱となってきています。そこでは、習得した基礎的な知識・技能を実社会や実生活の中で活用しながら自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探求して学びの成果等を実現し、更に実践に活かせるような子供たちを育む指導方法が問われています。

本校は2002年度に文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受けて以来、第1期、第2期の10年を経て、2012年度からは第3期の課題として「豊かな教養と探究心あふれるグローバル・サイエンティストを育成する中高大院連携プログラムの研究開発」をテーマに掲げ、世界的な視野を持った人材の育成に取り組んでいます。本年度はその最終年度にあたり、様々なSSH活動の実践を通して、主体的な学びを重視した各教科の授業を参加者にご覧いただき、検討していただくことにしました。あわせて、アクティブ・ラーニングや高大接続の分野で第一人者である京都大学高等教育研究開発推進センター教授の溝上慎一先生をお招きして、関連した情勢等についてのご講演をいただくことにしました。

本校ではSSHの指定を受ける以前から、教師が生徒に一方的に知識を与える教育ではなく、生徒に興味・関心を持たせ、生徒自らが課題を発見し、習得した知識で課題解決を図る中で更に新たな知識を習得し、仲間との議論を通して考えを深め、その成果をとりまとめて発表するという展開を重視しながら、様々な教育活動を実践してきました。それが今問われているアクティブ・ラーニングの枠組みの中でどのように捉えることができるのかを見直し、次の教育へつなげていきたいと考えています。また、カリキュラムの中で生徒の活動をどのように評価するのかは、主体的な学びを普及し定着させる上でも大きな課題です。本研究会に参加いただく先生や関係者の方々には、これらの点について一緒に検討していただき、ご批判いただきながら、今後の教育について考えていきたいと思っています。

校務等ご多忙のこととは存じますが、一人でも多くの先生、教員を目指す学生、関係者の方々にご参加いただき、ご助言賜りますよう、ご案内申し上げます。

2016年9月

筑波大学附属駒場中・高等学校

校長 林 久喜

記

1. 期日・場所

- 2016年11月19日(土)
- 筑波大学附属駒場中・高等学校

〒154-0001 東京都世田谷区池尻4丁目7番1号 電話 03-3411-8521 (代表)

FAX 03-3411-8977

URL <http://www.komaba-s.tsukuba.ac.jp/home/>

2. 研究主題

「主体的な学び～SSHの成果と展望～」

3. 日程

8:30～9:30	9:30～10:20	10:40～11:30	12:40～14:40	15:00～16:30
受付	第1校時	第2校時	研究協議会	講演会

〈1〉公開授業(9:30～11:30)

第1校時(9:30～10:20)

教科	題目と要旨	学年	授業者
社会	歴史的意義を追究する 歴史は暗記科目ではない。この言葉は、過去の人物や過去に起こった出来事を知ることが歴史を学ぶ上でのゴールではないということの意味していると思う。歴史の授業では、得た知識をもとに物事の因果関係を分析したり、人々の持つ様々な価値観に気づいたりすることが欠かせない。そのためには、どのような問いかけが有効なのか。授業を通して考えたい。	中学1年	小佐野 浅子
理科	「細胞をあつかう」～探求的な活動を意識した生徒実験の提示～ 探求的な活動や課題研究を踏まえたとき、まず現象をできるだけ純粋に実験や観察の結果だけから捉えようとする姿勢は重要である。そこで、タイトルやキーワード等をできるだけ与えない生徒実験を計画することで、生徒自身の問題解決への意識を高めたいと考えた。題材としては、動物細胞を生きのまま取り扱うために大切な浸透現象を取り上げる。	中学2年	仲里 友一

英 語	<p>Listening から Speaking 活動へ</p> <p>リスニング能力の醸成を目的としたLL授業で週に1時間日本人教師単独で行っている。音声教材や視覚教材の提示が容易なLL教室での授業で、「聞くこと」の活動は充実するが、聞くことで得た知識を発信型の能力育成へと発展させ、学習者自身が「使えた」と実感できる授業を展開したい。</p>	中学1年	多尾 奈央子
-----	--	------	--------

第2校時 (10:40~11:30)

教科	題目と要旨	学年	授業者
地 理 歴 史	<p>生徒が歴史教科書「で／を」考える授業</p> <p>「主たる教材」である教科書をいかに使うか。授業者や生徒によってさまざま考えられよう。ここ数年、高2必修の日本史Aでは、グループ学習を通じて生徒自身が教科書叙述を検討するといった実践を試みているが、今回はその過程の授業を行う。教科書「を／で」教えるに留まらず、教科書を材料に生徒たちが歴史的思考力を養っていくにはどのような授業が考えられるかを議論したい。</p>	高校2年	山田 耕太
理 科	<p>スモールスケールで行う化学平衡の実験</p> <p>化学平衡の実験には、理論的には難しいものも多いが、ルシャトリエの原理や緩衝液などの定性的な実験・観察ならば、比較的簡便に実施できる。今回は、セルプレートやサンプル管を活用して、生徒一人ひとりが主体的に実験・観察を行い、考察に取り組む授業を試みる。</p>	高校2年	梶山 正明
英 語	<p>即興型英語ディベート</p> <p>高校2年生ではコミュニケーション英語Ⅱ(4単位)のうちの1単位を外国人講師との Team Teaching で実施し、Listening と Speaking に特化した授業を展開している。今年度は即興型英語ディベートを活動の中心に据え、授業の中で対戦を重ねながら生徒達の英語運用能力の伸長を試みてきた。公開授業では実際に即興型英語ディベートの流れ(準備・対戦・評価)をご覧頂きたい。</p>	高校2年	須田 智之

〈2〉研究協議会（12:40～14:40）

教科	主 題 ・ 内 容	担 当 者
社 会	I 「公開授業をめぐって」 II 「生徒にとって〈学ぶ意味〉を感じる歴史教育」 新設「歴史総合」（仮称）は、既存の中等歴史教育の在り方を問う役割を担っている。「歴史を学ぶ意味」が問われ、教育課題を抱える学校だけではなく、大学進学をめざす生徒の多い学校でも、この点を考えることは不可欠となっている。歴史教育の根本にかかわる問題を具体的な実践を通じて議論できたらと思う。	I 授業者 小佐野浅子 山田 耕太
		II 助言者 坂井 俊樹 （東京学芸大学教育学部人文社会科学系教授）
理 科	I 「公開授業をめぐって」 II 「生徒が主体的に取り組む〈課題研究〉のための準備と指導」 本校では、高校2年でゼミナール形式の「課題研究・理科課題研究」（選択必修）を土曜日を活用して実施している。さらに希望者は、高校3年生でも「理科課題研究」を選択でき、その研究成果はSSH 事業などの対外的発表会で報告されている。こうした「課題研究」に、生徒が主体的に取り組むための環境作りや指導方法などについて協議したい。	I 授業者 仲里 友一 梶山 正明
		II 発表者 真梶 克彦 宇田川麻由 助言者 田中 義靖 （東京都立戸山高等学校・指導教諭）
英 語	I 「公開授業をめぐって」 II 「国際社会において、受容・発信する能力の育成」 公開授業に関する検討に加え、英語のみならず外国文化を理解・受容し、また自ら英語で発信する能力を高めていくために、英語科各学年の日々の授業で取り組んでいることを報告し、より効果的な方策を協議したい。	I 授業者 多尾奈央子 須田 智之
		II 発表者 山田 忠弘 助言者 卯城 祐司 （筑波大学人文社会系教授） 中川 智皓 （大阪府立大学工学研究科助教）

〈3〉講演会（15:00～16:30）

題名 「中等教育におけるアクティブラーニング型授業の展開」

講演者

溝上慎一氏

1970年生まれ。京都大学高等教育研究開発推進センター教授、教育アセスメント室長（大学院教育学研究科兼任）、京都大学博士（教育学）。学校法人桐蔭学園教育顧問。日本青年心理学常任理事。専門は、青年心理学（現代青年期、自己・アイデンティティ形成、自己の分権化）と高等教育・高大接続（学生の学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジション）。主な著書に『自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる』（世界思想社、2008年）、『高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育—』（ナカニシヤ出版、2014年、編著）、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（2014年）、『アクティブラーニング・シリーズ（全7巻）』（東信堂、2016年、編著）など多数。

概要

2014年末、初中等教育の次期学習指導要領改訂のポイントのひとつとして、アクティブラーニングが示された。米国の大学教育改革から始まったアクティブラーニングは、いまや日本で小学校から大学までの全学校教育を巻き込む学習論となっている。

今年度の講演会では、アクティブラーニング研究の第一人者、溝上慎一氏をお招きし、主に中等教育におけるアクティブラーニングの考え方や実践例について、語っていただく予定である。

4. 問い合わせ・申し込み

- 参加資格 参加は教育関係者に限らせていただきます。
- 資料代 1人当たり 2,000 円です。学生・大学院生は 1,000 円です。
当日受付でお支払い下さい。（資料および報告書の印刷・郵送費です。ただし、学生・大学院生には報告書の送付は致しません。）
- 参加申込 11月14日(月)までに本校 WEB サイト（下記）からお申し込み下さい。折り返し返信メールが届きます。返信のない場合は、下記の問い合わせ先までお問い合わせ下さい。
- 弁当 本校 WEB サイトから事前申し込み（昼食の注文）をされた方にも、当日、弁当（1,000 円）を販売いたします。本校周辺の飲食店は数に限りがございますので、昼食をご持参、または弁当販売をご利用下さい。
- 問い合わせ先 本校研究部 e-mail アドレス：komaba.kenkyubu@un.tsukuba.ac.jp
- 交通機関 末尾の地図をご参照下さい。自動車での来校はご遠慮下さい。
- 宿泊施設 宿泊施設は、渋谷周辺の宿泊施設が便利です。各自でお申込み下さい。

—— 参加申込先 ——

本校 WEB サイト

URL <http://www.komaba-s.tsukuba.ac.jp/home/>

スーパーサイエンスハイスクール（略称SSH）について

文部科学省が平成 14（2002）年度から始めた研究開発事業で、高等学校等を対象とし、理数系教育を重点的に実施することにより、その改善に資することを目的としています。平成 28（2016）年度は全国で 200 校が SSH の指定を受けています。

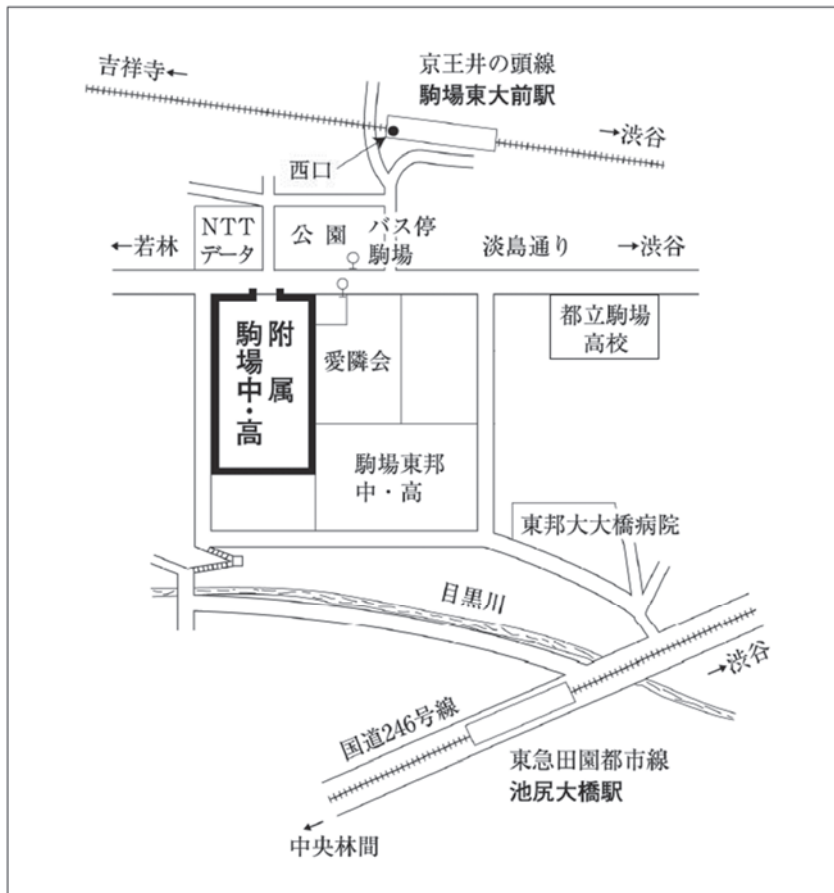
具体的には、

- ① 学習指導要領によらない教育課程の編成により、理科、数学に重点を置いたカリキュラムの開発
- ② 大学や研究機関等と連携し、生徒が大学で授業を受講、大学の教員や研究者が学校で授業を行うなど関係機関等との連携方策の研究（高大連携）
- ③ 論理的思考力、創造性や独創性を一層高めるための指導方法の研究
- ④ 科学クラブ等の活動の充実
- ⑤ トップクラスの研究者や技術者等との交流、先端技術との出会い、全国の SSH 校との相互交流を目標としています。

本校では、これまでの研究を踏まえ研究開発課題「豊かな教養と探究心あふれるグローバル・サイエンティスト（global scientist）を育成する中高大院連携プログラムの研究開発」のもと、以下の 6 つを SSH の柱として、今年度 5 年計画の第 5 年次の研究を推進しています。

- （1）すべての生徒の探究心や研究意欲を高める大学研究室体験の実施
- （2）意欲の高い生徒のためのグローバル・サイエンティストを目指す「課題研究」等のプログラム研究と実施
- （3）科学者・技術者としての研究活動に必要な情報収集能力・メディア活用能力の育成
- （4）国際交流や学会発表の場で通用する英語プレゼンテーション能力の育成
- （5）SSH 校や大学との連携を活かした数学的思考力を育てる教材の開発と普及
- （6）科学者・技術者に必要な科学的リテラシーの育成

筑波大学附属駒場中・高等学校案内図



○利用交通機関

京王井の頭線「駒場東大前」駅西口下車徒歩 7 分

東急田園都市線「池尻大橋」駅北口下車徒歩 15 分

(渋 51) 東急バス (渋谷-若林折返所)

(渋 54) 小田急バス (渋谷-経堂)

いずれも「駒場」下車徒歩 1 分